

東京大空襲・戦災資料センター建設までの経過と建設後の反響と課題

梶 慶一郎

1. 1999年8月建設募金運動を始めることを決定するまで

—平和を願う叢知の結集が決意させた—

(1) 東京空襲を記録する会の発足と、「東京大空襲・戦災誌 全5巻」の発刊

1945年3月10日の東京大空襲は、米軍によるB29、334機が、東京の下町を襲い、1667トンの爆弾を投下した。その結果、約2時間に10万人に及ぶ死者と負傷者13万人を出し、消失家屋26万戸（104万人が家を失う）、東京の40%が一挙に消失した。これは、非戦闘員を対象にした無差別攻撃で、広島での原爆投下（即日の死者は13万人を越えた）に次ぐ、世界最大の都市空襲であった。

東京空襲が始まったのは、1942年4月18日であった。それ以後2年半は空襲はなかったが、1944年11月24日からは、ほとんど連日空襲に見まわれ、1945年8月15日まで続いた。これらによる東京都下の死者数は14万人を超え、消失家屋は77万戸を超えた。

戦後、戦争・戦災の惨禍を語り継ぐ東京空襲・戦災についての調査・研究・資料収集は資料館の建設を含め、広島、長崎、沖縄のそれに比して大きく立ち遅れていた。

1968年3月松浦総三氏が雑誌『文芸春秋』に「書かれざる東京大空襲」という論文を掲載したことをきっかけに、「東京空襲を記録する会」が発足した。メンバーは、有馬頼義、松浦総三、早乙女勝元、石川光陽、高橋碩一、星野安三郎、加太こうじ、安田武、家永三郎、阿部知二、徳川夢声、深尾須磨子、丸岡秀子などの各氏であった。

「東京空襲を記録する会」の目標は、正史としての東京空襲史・資料集の編集・刊行であった。しかしこの仕事は、民間出版社ではなく、自治体の仕事として取り上げてもらうべきであるとして、当時の都知事である美濃部亮吉氏へ要請書を提出した。その結果、都から、7700万円の助成が決まり、その金で、1970年8月5日に「財団法人東京空襲を記録する会」が設立さ

れた。その時から東京空襲・戦災資料の収集と編集がはじまった。

そして、1974年2月5日に「東京大空襲・戦災誌全5巻」が完成した。内容は

a 都民の戦災体験 1・2巻

1000人に近い戦災体験都民が記した克明な記録で、執筆を契機として、空襲下の人的な日記や記録、警報メモ、ネガフィルム、空襲スクラップなど、多くの資料が提供された。

b 日本軍部・政府公式資料 3巻

戦中はマル秘であったが、戦後公開された警視庁の資料や、米国側の「米軍戦略爆撃調査団報告書」などが大量・多種にわたり集められた。

c マスコミ関係、個人日記、回想録 4巻

戦中・戦後の新聞・ラジオ・雑誌の報道資料などがある。

d 空襲下生活関係資料 5巻

空襲下都民の日常生活に関する資料で、防空演習、防空訓練、学童疎開、勤労働員などの資料集である。

(2) 資料収集から公開運動の展開へ

5巻の資料集の刊行が終了したあと、集約収録された資料類と未編集資料類が残された。特に米国の資料は、15年戦争資料、昭和史資料として着目され、それらの資料整理の仕事が「記録する会」に課され、財団法人が解散したあと、任意の団体にかわって行われた。米国USSBSの基礎資料の収集・整理については、美濃部都政の引き継ぐ助成が得られ、歴史学者の高い評価を得る貴重な作業となった。

そして、早乙女勝元氏は、『東京大空襲』（岩波新書 1971年）を著し、又、松浦総三、今井清一、早乙女勝元等で『日本の空襲』全10巻（三省堂 1981年）が刊行され、空襲・戦災ジャーナリズムの誕生・隆盛が

宣伝されて、資料の公開・活用が進んだ。

(3) 東京都による「平和の日」の設定から、平和祈念館構想へ

作家、研究者による資料発表は、記録資料館の建造物建設運動へと要望がすすんできた。その中で、3月10日が東京都による平和の日(1990年)として設定され、また、平和祈念館基本構想懇談会(座長 永井道雄)も発足した。

基本構想では

- ① 東京空襲の犠牲者を悼み、都民の戦争体験を継続すること
- ② 平和を学び、考える場とすること
- ③ 21世紀に向けた東京の平和のシンボルにすること
- ④ 平和に関する情報のセンターにすること

以上のような構想であったが、建物の建設はすすまなかった。

(4) 被災の最も大きかった地に、東京大空襲の体験者が「平和資料センター」建設のために土地の提供を申し出る

1990年、東京都江東区北砂の地に「平和資料センター」建設のために、175坪の土地の提供をしたいという人の申し出があった。この地は、東京大空襲の被災が最も大きかった所であり、その人も体験者であって、平和のためならばという願いからの申し出であった。

当時は、早乙女勝元氏が製作にかかわっていた映画「戦争と青春」(東京大空襲を描いた作品)の製作運動の展開中であり、その勢いもあって、また、バブル期でもあったため数億円の企画内容で検討した。しかし、こういうものは、本来、都が建てるものであり、都への建設要望がすすめられていることもあって、暫く様子を見ることとした。また、民間での人格なき社団で建設することは、税金問題もからめて、大変金のかかることであり、検討を継続していた。

(5) (財)政治経済研究所との提携

1993年、(財)政治経済研究所(1946年8月設立、戦前の東亜研究所を引き継いだ財団で初代理事長は末広巖太郎)は、経営基盤の財政強化という課題で検討をすすめていた。「平和資料センター」建設のために申し込みがあったこの土地を、政治経済研究所の財政強化という課題にすぐには結び付かないが、将来を見越してこの土地を政治経済研究所へ寄贈してもらうことと

し、1994年無税でこの土地を移転した。

また、その当時、埼玉県大井町で医師をしていた大島慶一郎氏が、「大島社会文化研究所」を設立し、それを財団法人にするべく、埼玉県当局と交渉していた。しかし、財団法人を設立するには、それに見合う十分な財産はなく、従って、財団法人政治経済研究所との合併が検討され、1996年1月合併した。そして、大島社会文化研究所は政治経済研究所の付属研究所となった。これにより、政治経済研究所は、財政面で一定の強化がなされた。

(6) 1999年8月、石原都知事が都立平和祈念館構想を凍結

「東京都は『平和祈念館』を創るべきである」という都民の要望運動は、1990年代、ずっと行われていた。美濃部知事から青島知事までの各知事は建設をするという意思表示をしてきた。

従ってこの間、東京空襲を記録する会が集めた資料は江戸東京博物館に保管・展示され、また、都は空襲体験者300人の証言記録をビデオに録画した。さらに、東京都生活文化局には、新たに多くの資料も寄せられた。

しかし、1999年8月石原都知事は、都立平和祈念館の凍結を決めた。これにより、江戸東京博物館に寄託されていた資料は、記録する会が引き取ることとされ、急いで引き取らざるをえなくなった。そこで、その後の方針が検討されることになった。

1999年8月、東京空襲を記録する会をはじめ、平和運動関係諸団体が、意見を重ね、政治経済研究所が母体となって「平和のための戦争・戦災資料センター」という名称で、建設募金運動を呼びかけていくことを決めた。

早乙女勝元氏には、財団法人政治経済研究所の平和軍縮研究室長になって頂き、「平和のための戦争・戦災資料センター」建設募金運動の検討が始まった。

以上に述べたこれらの経過は“平和を願う叡知の結集が建設募金運動を決意させた”ものと言える。

2. 1999年8月～2002年3月の開館まで

—平和を願う叡知の結集が作り上げた—

(1) 名称の決定と募金目標額1億円

建設する建物の名称について、関係者の意見を聞いて「平和のための戦争・戦災資料センター」とした。

そして、センターのテーマを

イ. 昭和の戦争体験を正しく伝える

ロ、戦争災害を調査研究し、究明する

ハ、世界の戦争・戦災資料を調査・研究し、戦争の歴史を伝える

ニ、平和研究を通じ、世界の“草の根”組織と連帯し、平和の尊さを訴える

とし、スローガンを“東京に平和を考え、交流する拠点を！！”とした。

募金目標額は、区切りよく1億円とした。建物の模型は、最低数千万円でできる2階建て木造作りとして、スケッチを描いた。

(2) 各界から多くの人の賛同が寄せられる

1999年秋から準備に入り、各界のかたがたに賛同のお願いの手紙を出し、大変多くのかたがたからの賛同のご返事を頂いた。

その中から、いくつかのメッセージを紹介すると、

・池辺晋一郎氏（作曲家）

「資料展示保存だけでなく、平和についての様々なイベント等の開催も是非」

・一番ヶ瀬康子氏（日本女子大名誉教授・日本介護福祉学会会長）

「大変意義ある企画だと思います。是非、よりよく充実したセンターの実現を願っています」

・犬飼智子氏（エッセイスト）

「戦争の悲惨、残虐、無駄を体験者が後世に伝えることは大切です。すべてがゲームと化している現代で、戦争のリアリティを知らせることが、次の世代の平和へつながります」

・永六輔氏（放送作家）

「おつかれさまです」

・大橋巨泉氏（タレント）

「1945年3月10日未明、疎開先の千葉から見た東京の空が昼のように明るかったのを覚えています。両国には父が一人、母は一睡もしませんでした。我々には語り継ぐ義務があります」

・岡本三夫氏（広島修道大学教授・元平和学会会長）

「過去の真実を記録・分析し、教え・伝えることは今生きている人間の義務であり、そうしてこそ人間の尊厳を保つことができるのだと確信します」

・羽田澄子氏（記録映画作家）

「戦争体験を風化させず、平和を守るために、このようなセンターは是非必要だと思います」

・早坂暁氏（作家）

「いつも被害を受けるのは庶民です」

・森村誠一氏（作家）

「本来は国がすべきことを民間でのご努力に敬服すると同時に国の怠慢が恥ずかしいとおもいます」

・吉永小百合氏（女優）

「21世紀が、戦争のない平和な世紀になりますよう、皆で力を合わせて行動しましょう」

なお、呼びかけ人代表の早乙女勝元氏は、次のようなメッセージを書いた。

作ろう今こそ！

早乙女勝元 [作家・財政経済研究所 平和軍縮研究室長]

「3月10日は、なんの日か？」と聞かれて、東京大空襲と答えられる人は、どのくらいいるのでしょうか。若い人たちの場合、残念ながら、正解者はごく少数という調査結果があります。

戦後の歳月も、半世紀余が過ぎて、戦争を知らない世代が圧倒的となりました。ほどなくして、戦争体験が「歴史」に移行するのは、あきらかです。すると、これからは追体験による知性こそ、歴史認識の基礎に、きちんと据えていかねばなりません。

それには、資料や記録が不可欠です。

戦争と民衆はどうかかわったのか。東京大空襲の実態のみならず、沖縄の地上戦から、広島・長崎の原爆、被害者から加害・世界までを総合した資料センターがあったらいいのにな、の声と声が、

「作ろう今こそ！」の声に、変わりました。

21世紀を前にして、東京で初めての試みです。みなさん方の、熱いご支援をお願いする次第です。

(3) 2000年3月9日計画発表とマスコミ報道による反響の大きさ

2000年3月9日、3月10日の東京大空襲の前日に計画発表をした。NHKをはじめ、新聞各社が全国報道をしてくれた。

翌日から、全国各地からの電話の問い合わせが殺到

した。以後、8月15日、12月8日など太平洋戦争にかかわる日の前後に、建設募金運動の進展状況を各テレビ、新聞などが報道した。その度に、その翌日から電話の問い合わせが殺到するようになった。「資料を送って下さい」という住所氏名が記録されたノートは、各ページ2行ずつで、2年の間に7冊に及んだ。

募金の郵便振替口座の通信欄には、募金する方の切々な声が記されていた。「今、年金暮らしなので、1口しか募金できないが、是非、完成させて下さい。」「小学校4年の時、飯能で空が赤く焼けた東京大空襲を見た。こういうことは、もうあってはならない」と記して、300万円振り込んでくれた方がいた。

以下、いくつかの募金された方々の声を記すと、

「3月10日の空襲で、おぼと2人のいところを失いました。毎年、3月10日が来ると胸の痛みを覚えています」

「小学校入学前に埼玉に疎開し、3月10日墨田区緑町から叔父・伯母が着の身着のまま埼玉の実家にたどり着いたのを覚えています。1日も早く資料センターの建設を！」

「3月10日の下町の空襲は、いまだ昨日のことに心に目に焼きついています。遠く離れた荻窪の東の空が夕焼けのように赤く見えました。空襲警報は、しばらくたってからだされました。2度とこんな悲劇をくりかえさないために、募金をさせていただきます」

「3月10日、向島に住んでいて空襲にあった者です。85歳になりました。皆さんの活動の成功をお祈りします」

「父と叔父を亡くし、行方不明のまま横網町公園にお参りしますが、私の孫たちにも語り伝えたくセンターの実現を応援します」

「13歳の時、戦災で自宅を失いました。早乙女先生の生き方にいつも励まされています」

「本所藍川町で空襲にあいました。なんとか自分は一命をとりとめた1人ですが、隣組、学校の友達も1人も残っていません。73歳になった今でも3月10日は涙が出ます」

「55年目の暑い夏。この国はふたたび過ちをおかそうとしている。足腰は弱ってきていても、私たち世代がモノを言い、戦争の真実をキッチリ語り継ぎましょう」

「『東京新聞』の橋本さんの記事、拝見しました。私も3月10日の米軍の無差別東京空襲で深川森下町にいた父母をはじめとして計7人を失っています。55年後の今日でも、その無念さと悲しみは消えません。大変でしょうが、がんばってください」

(4) 募金の進展

2000年3月よりはじまった募金は、次のような進展であった。

2000年3月	1200万円
9月	3900万円
2001年2月	5920万円（一次目標突破）
9月	8300万円（3324名）
2002年2月	1億0074万円（3790名）
6月	1億1000万円（4085名）
2年間で目標の1億円を突破した。	

(5) 「世界の子どもの平和像」の仮設置

広島原爆で2歳の時被爆し、小学6年生で発病、12歳で息を引き取った佐々木禎子さんの像が、「原爆の子の像」として広島市の平和祈念公園に設置されている。

この“サダコの像”の話を知ったアメリカの子どもたちが、アメリカのロスアラモスに「子ども平和像」を建てた。このことをきっかけに、東京の中高生たちも「世界の子どもの平和像」を東京に作ろうと、1997年「世界の子どもの平和像を東京に作る会」を結成し、1千万の募金を集めて、2001年5月5日、像が完成し、除幕式が行われた。

像のデザインは、子どもたちの応募の中から、中学2年生の阿部可奈子さんがデザインしたものが選ばれた。

この像は、ひびが入った大きな卵の傍らで、ひまわりの花に水を上げる少女が立っている姿となっている。この像の意図は、“ひびの入った卵には、いまにもこわれてしまいそうな平和と本当の平和の誕生という二つの意味がある。卵にリボンがかけられているのは、これ以上こわれないようにする包帯であり、誕生を祝福するリボンでもある。ひまわりに水をやる少女は人間の手で未来を築こうというイメージで描いた”

とのこと。

この像は、子どもたちの希望としては、第五福竜丸のある場所に設置したいということで都議会に請願書を出したが、賛成少数で否決された。理由は、第五福竜丸といわれがない、設置者が永続して管理できない、などとのこと。今後も都議会で決定するまでは、仮設置ということで、政治経済研究所の前におかれている。

(6) 母子像の設置

戦災資料センターの前に、彫刻家・河野新氏の母子像がある。この母子像は、「戦火の下で」と題して、母親が子どもをしっかりと抱いている姿の胸像である。

この像は、東京大空襲の体験者である橋本代志子さんの強い要望で立てられた。橋本さんご自身の体験は、火に追われて川に飛び込む時、背負っていた赤ん坊を、背中から下ろして手に抱いて飛び込むよう、一緒にいた母親から言われて、そのようにしたために、子ども死なせずにすんだという、強烈な体験が、この像を身近かにほしいと思いたせた。

この母子像を、江東区役所前に設置してほしいという運動を、橋本さんたちが行ったが別の母子像が江東区役所前に立てられた。そして漸く、「子どもを抱いた母子像」が資料センター前に設置されることになった。

(7) 建設運動の中で寄せられた「歌」5曲

2年間に及ぶ、戦災資料センター建設運動の中で、この運動を記念し、次の作詞家、作曲家の方から歌が5曲寄せられた。

峯陽 作詞・作曲 「タンポポのうた」

峯陽 作詞・作曲 「平和ってどこに」

石原いつき 作詞・長森かおる 作曲 「平和の願い」

藤みどり 作詞・井手口史朗 作曲

「母のまち父のまち PART 1」

藤みどり 作詞・石原いつき 作曲

「母のまち父のまち PART 2」

「タンポポのうた」「平和ってどこに」「平和の願い」の3曲は、2001年3月6日に催された「戦災資料センター建設の集い」に歌われ、発表された。

「母のまち父のまち」を作詞した藤みどりさんは、1944年生まれ、翌年の3月10日の東京大空襲で父を亡くし、戦災資料センター建設の話ラジオで知り、募金を寄せると共に詩を書いた。この詩には、センター

が建設される地元の町名が多く入っており、江東区の老人施設などで歌われている。

(8) 建物、敷地の特徴

戦災資料センターの建物・敷地の特徴としては、建築家・三沢浩氏の意図が盛られている。三沢浩氏は、松代大本営跡地の資料館を作る運動にも参加し、その建造物について、設計の相談を受けている建築家である。

以下、いくつかの特徴を記すと、

1. 炎で燃え上がる模様のレンガ作り
2. 火が燃える赤いガラス窓
3. 望楼へ登る、防空壕に入る感じの狭い階段
4. 望楼—これは、日本の半鐘塔の意味であるが、アウシュヴィッツの監視用望楼を参考にしたとのこと
5. 建物の四隅にある、バツェン形式の梁—これは、ホロコースト博物館が沢山のバツェンで囲まれた作りになっており、それをモデルにしたとのこと。なお、このバツェンの梁は、建築物の構造上の強化のための補強にもなっている。
6. 母子像
7. 世界の子どもの平和像
8. 敷地の隅にある稲荷神社の祠—これは、土地の提供者が、この地で運送業を営んでおり、商売繁盛のために昔から稲荷神社の祠があったとのこと。土地の提供の時、この稲荷神社の祠は、いつまでも守り続けることを条件にこの土地を頂いた。祠の方角は、きのえね（甲子）である。

(9) 名称を、東京大空襲・戦災資料センターと決定

建設募金運動をはじめるときは、“平和のための戦争・戦災資料センター”としたが、募金した方々の多くが、東京大空襲の体験者・関係者であったこと。建物がそんなに大きなものではなく、東京大空襲に特化した方が特徴が出ること。東京では、東京空襲をテーマにした資料館は他にはないこと。などの意見で、“東京大空襲・戦災資料センター”とした。

(10) 2002年3月9日、開館式が行われる

4000人を超える方からの募金のお陰で、建物が完成した。開館式には、350の方が参加した。各テレビ局、新聞社が報道してくれた。翌、3月10日には、横綱公園で行われた東京空襲戦没者慰霊祭が行われ、そ

の参加者たちが資料センターにも訪れ、この日は850人の方が来館した。

特筆すべきことは、元米軍のハップ＝ハロランさんが参加してくれたことである。ハロランさんは、1945年2月17日武蔵野にある中島飛行場を攻撃し、日本軍により撃ち落とされ、日本の捕虜になった。その後、上野動物園で裸のまま、オリに入れられ、見世物にされたという。そして、3月10日の東京大空襲の時には、日本軍の牢獄の中で被害に遭った。ハロランさんは、戦争の加害者であったが、被害者でもあった。

ハロランさんは、開館式で、「過去には敵対した時期もあったが、お互いの知恵と理解で平和な世界を作るために手をたずさえていきたい。このセンターがその発信基地になることを願っています」と発言した。

以上の経過は、“平和を願う叡知の結集がセンターを作り上げた”と言える。

3. 開館後の反響

(1) 開館後の特徴

3月10日開館して以来、2003年1月末で10500人を超えた。来館する体験者は、語れば涙となる。語るも涙、聞くも涙という日々が続いた。感想ノートも何冊にもなった。自分の体験を80枚の絵にして送ってくれた人もいた。

中高生の平和学習で、岩手や大阪から多くの生徒が団体で来た。その中高生から感想文も寄せられた。体験者の話を聞いた中学生がその話を紙芝居で作り送ってくれた。

この11カ月間の特徴を記すと

・10万人の命の重さがにじむ体験者の証言

受付するのもしどかしく、堰を切ったように空襲の体験を語って下さる方、遠い道のりも戦火の中を逃げ切ったことを思えばつらくないと年配者。センターで昔のご近所の方と57年ぶりに再会された方。つらい体験をセンター開館を機に家族に語りはじめた方も少なくない。また、家族揃ってやお孫さんを伴っての来館、「父が新聞の切り抜きを持って、どうしても、と上京してきたので」と、写真の前で「これがまさに当時の私たち」と語る姿も。体験された方々の貴重な証言の数々を記録することを始めた。

・寄せられる新たな資料の数々

「後世に語り継ぎ、残すためなら」と、これまで仏壇等に大切にしまっていた資料を提供くださる方も多い。死んだ父親の胸ポケットに残された焼け焦げた「非常線突破の証明書」も届けられた。センター近くの方々が何度も足を運ばれ、北砂の警防団の感謝状やもんぺ等が届けられている。

・胸に刻む空襲、中学生、高校生の学習旅行

学校関係者の来館は、すでに岩手、東京、愛知、石川、滋賀、京都、兵庫などの41校（中学、高校、大学のゼミ）から1400人。石川県からは、全校あげて7人の分校の来館。岩手の中学校の70人が、「平和について考える一命の尊さを学ぶ」をテーマに学習旅行。ニュースで知り、自分達で修学旅行のグループ訪問に決めた愛知の中学生。羽村の中学生は、「ふみだせ、はじめの一歩、戦争を知るために一校外学習：東京大空襲」で72人が次々到着。そして、体験者の話を聞き紙芝居を作った。

・団体やグループの学習会や連続講座 センターを中心に魅力的なコースも

長岡市議会有志6人は、長岡空襲の資料センターをつくる計画の参考にすると来館。その他、年金者組合、歩こう会、俳句の会、同窓会や老人会、労働組合、新婦人の会、社会科教員の学習会、健和会、健康保険会の連続研修講座等、さまざまなサークルや団体、グループが来訪。また「資料センターと深川界限を訪ねる会」、東京下町川の辺歴史散歩、戦跡めぐりなど、センター見学を中心にした魅力的なコースめぐりも始まっている。

・海外からも取材や来館者

ワールドカップ取材で来日したデンマークの通信社の記者が、東京大空襲を伝えたいと早乙女館長にインタビュー。日本人の母がいつも語ってくれる空襲のことを知りたいと、アメリカからきた親子など、海外での報道や英字新聞をたよりに訪れる海外の方も少なくない。

(2) 来館者の感想ノートから

「高知県から来ました。3月10日、オープンの日に来ることができて感激です。高等学校の教員をしています。今後とも東京大空襲を後世に伝え、平和教育に力を入れていきたいと思えます。」

「ここで、沢山の方々の声を聞いていますと、それが遠いことではなく、まだ生きている歴史だと言うことがわかります。こういう語りの場としても、ここが大切な場所だと思いました。戦後生まれです。」

「学童疎開で、その時6年生で学校は浅草。今でもあのB29が夢の中に出てきます。友達のお母様達がある日、多く亡くなりました。子どものためにも、二度とあのようなことが起きませんように世界が平和であるように祈らずにはおれません。」

「母からいつも東京大空襲のこと聞かされていました。想像を絶する出来事に、言葉が見つかりません。子どもたちが墨のようにになっている姿に涙が止まりません。沖縄の祈り、ヒロシマの祈りとともに東京大空襲のことも語り継いでいかなければならないと痛感しました。」

「その時、慈恵医大生のひとり、出陣学徒を延期された身分の私は、11日～20日くらいの間、警官に引率されて深川・本所に後片付けに狩り出されました。きょう写真資料をあらためて目にすると、臉が霞み、血が頭にのぼって正気を失いかけてました。無抵抗、無力な庶民たちをなんの予告もなく人間の判断だけで殺戮して恥じないとは、言葉にもならぬ傲慢と犯罪以外の何ものでもないでしょう。WTC（2001.9.11）はたしかに残酷なテロです。しかも真珠湾にたとえて日本人の卑劣さを云々するなら、1945.3.10の下町空襲は我が決して忘れ去ることなく、20世紀におけるホロコーストの記録にとどめてしかなければなりません。」

「平和像建設に多少関わり、平和について、戦争史について興味がありました。ここへ来て良かったです。質問にもていねいに答えていただき、とても気分よく見ることができました。平和のこと戦争のこと、若い僕らがもっともっと知り、僕らからさらに多くの人に伝えていかないといけないと、改めて感じさせられました。」

「新しい建物のにおいとは裏腹に、展示物や写真の強烈さにショックをうけてしまいました。折り重なるように死んでいった人たちの写真でおもわずたちずんでしまいました。今、有事立法を策動している。この無残にも亡くなった人たちの叫びを無駄にしないよう、反対の世論をつくっていかねばならないと心

新たにしました。」

(3) 都市空襲シンポジウムの開催

開館を記念して6月に「都市空襲を考える」と題したシンポジウムが早稲田大学で開かれた。早乙女勝元館長の挨拶に続いて、荒井信一・茨城大学名誉教授が「空襲の歴史と現在—リビアからアフガニスタンまで」、宮崎繁樹・元明治大学総長が「都市空襲と国際法」と題して講演。このシンポジウムは、政治経済研究所が行っている公開定例研究会の一つでもあり、今後、毎年、都市空襲をテーマにしたシンポジウムを開催していく上での一つの事例になった。

4. 今後の課題

(1) 資料や証言内容の研究分析・充実と活用

資料は約3600点あり、現在も資料の提供の申し入れが続いている。

これらの資料を整理し資料リストを作ること。時により、又、必要により、テーマごとの企画を立て、資料の活用をはかること。感想ノートの整理保存も含め、内容を充実し、入館者の輪を広げること。などが求められる。

現在展示されている内容は、次のようなテーマで資料が並べられている。

- ・太平洋戦争はじまる。日本海軍機、パールハーバーを爆撃
- ・本土初空襲、米軍機16機の奇襲攻撃
- ・防空、それから2年半、東京に空襲はなかった
- ・B29爆撃機、姿を現す
- ・3月10日東京大空襲と山の手・城南空襲・八王子空襲まで
- ・全国空襲—大都市から小都市へ
- ・終戦・戦後—終戦という名の敗戦

又、寄せられた多くの絵画も展示され、写真とは異なる迫力で見ると人に印象を与えてくれる。ビデオも20本近くあり、1978年にNHKが製作した「東京大空襲」が一番多く上映されている。

これら、資料研究、公開の充実と合わせ、シンポジウムも開いて社会に貢献していくことが求められている。

(2) 維持会員の拡大と輪を広げる

募金で建物が完成しても、その後の維持を続けてい

くことは、また新たなるテーマでもある。現在、ボランティアの方々の協力で運営されているが、それでも一定の財政は必要であり、そのためには、協力して頂ける多くの維持会員の組織が求められる。現在維持会員は1250人であるが、最低3000人を必要とする。個人一口2000円以上、団体一口10000円以上で協力を呼びかけている。

この財政の強化をするためにも、企画内容を変化させ、充実させ、多くの人の期待に応えていかなければならない。

(3) 戦災資料センターを入れた様々な散策コースの宣伝

戦災資料センターのある所は、東京大空襲の被災の最も大きかった所であり、この特徴も活かした様々な散策コースが考えられる。

そして、これらの散策コースも多くの人に知ってもらい、何度も来て頂けるようにしたい。

・戦争と平和コース

第五福竜丸展示館からは4 kmのところであり、又、靖国神社の遊就館（軍神、英霊をまつり、軍国熱、好戦感をあおった戦争博物館）とは、地下鉄一本で来られる。特に戦災資料センターとは対比した遊就館との同時見学は、平和を学ぶためには、多いに参考になる。

江東区内には、学童疎開資料センター、戦災の慰霊

碑、馬頭観音（江東区内には、馬を使った多くの運送業者がおり、東京大空襲で多くの馬も死んだ）なども多くあり、これらを含め、戦跡めぐりができる。

・文芸、文化、歴史散策コースなど

松尾芭蕉、小林一茶の石碑、石田波郷資料館なども近くにある。これまでも、俳句の会などの団体も資料センターへ来た。

清澄庭園、深川江戸資料館、江戸東京博物館も含めた歴史散策コースもできる。又、江戸料理の深川めしも旨い。

・水上バス散策コース

資料センターのある場所から、水上バスで隅田川に出て、お台場までのコースもある。そのあとは、ゆりかもめで、臨海公園を散策できる。

東京大空襲・戦災資料センターは、そのスローガンを、“戦争の惨禍を時代に語り継ぎ、平和を学び希求する”場とした。

平和を願う叡知の結集で作上げた、この資料センターを維持していくためにも、今後とも多くの人の協力が必要である。そのために必要なあらゆる努力をしていかなければならない。

(筆者 財団法人 政治経済研究所理事)